

「水とともに生きる」

大洲市立大洲北中学校 三年

吉岡 佑菜
よしおか ゆな

虫の音が響く夏の夜、かがり火の光が川面を照らす。その光の中、鵜匠と鵜が息を合わせ、魚を追っている。大洲市を流れる肱川では、昔から「うかい」が行われてきた。その穏やかな光景を見るたびに、私は肱川とともに続いてきた人々の暮らしを思い浮かべる。

平成三十年七月、西日本豪雨により、町では断水や停電が発生した。多くの人が普段の生活を失い、不安に駆られた。町には何度も防災無線が鳴り響き、そのたびに強い不安を感じたことを、今でも覚えている。幸い私の家庭では断水や停電もなく、普段と変わらない生活を送っていた。しかし、テレビやスマートフォンには、見慣れた景色が泥水に沈む様子が映し出されていた。その光景を見た時、現実とは思えず、ただ言葉を失った。そして、不安と同時に、自分にできることは何だろうとも考えた。

そのような状況の中で、一生懸命に働く親の姿が気になった。母は水害にあった人々の健康管理に関わっており、帰りが遅くなる日が一ヶ月ほど続いた。疲れた様子で帰ってくる母の姿を見るたび、災害の影響の大きさと、そこで懸命に働く人々の姿を感じた。母から避難所の様子を聞く中で、避難生活ではプライバシーや食料の確保だけでなく、衛生管理が重要であることを知った。入浴や手洗いうがい、歯磨き、便器の洗浄など、日常では当たり前に行っていることも、水が無ければ十分に行えない。水が不足すると病気が広がり、生活の安全が脅かされる。衛生を保ち、命や健康を守るためにも、水はなくてはならない存在である。

母の話を聞くうちに、私も自分の日常を振り返った。これまで水の大切さについて深く考えたことはなかった。歯を磨く時や顔を洗う時、

何気なく水を出しっぱなしにしてしまうことがあった。これからは、歯を磨く時にはこまめに水を止め、顔を洗う時も必要以上に水を流し続けられないよう心がけていきたい。ほんの小さなことかもしれないが、その一つ一つの積み重ねが、水を大切にすることにつながると思う。また、家族とも話し合い、災害時に備えて水や非常用トイレを備蓄するようになった。

西日本豪雨の経験を通して、水の大切さを強く感じた。普段は穏やかな肱川の流れも、災害の際には町の人々の生活に大きく影響する。川や水辺の環境を守ることは、そこで暮らす人々の生活や伝統、そして「うかい」といった文化を守ることもつながる。私は将来、小学校の教員になることが夢である。この経験をもとに、水の脅威だけでなく、水があるありがたさを子どもたちに伝えていきたい。私たち一人一人の意識が、未来の水環境を築いていく。水のありがたさへの感謝を忘れず、町や川の豊かさをこれからも守り続けていきたい。

いつか大洲市に戻ってきた時、かがり火の光はまだ肱川の川面を照らしているだろうか。もしその光景に出会えたなら、穏やかな川の流れや生き物、人々の暮らしの豊かさ、そして水のありがたさを再び思い出すだろう。